

第59回委員会審議資料2の説明に対する疑問です。委員会への意見書として下さい。

「淀川・宇治川・木津川・桂川における 治水対策の考え方について」への疑問

NO.1

2007年9月9日

自然愛・環境問題研究所 代表 浅野 隆彦

- 1) 淀川本川、宇治川、桂川の堤防決壊による被害想定を昭和28年台風13号の2倍の降雨で検討するのは何故か？(P.8 P.9)
計画規模に対応する計画雨量でもって検討することで、計画の一貫性、目標の整合性が保てるのではないか。過大な被害を宣伝することが目的なのか。
- 2) 木津川流下能力図においても同じ。(P.11)
- 3) 名張川も同じ。(P.12)
- 4) 浸水想定においては、全て床下と床上を区別して示すべきではないか？(P.10 .11)
- 5) 岩倉峡上流部の・・・比較において、上野遊水地の整備と河道改修の後でのピーク流量が2,900M³/Sと読めるハイドログラフが示されているが、岩倉峡の流下能力や遊水地の越流堤諸元などの条件が示されていない。(P.19)
そのような計算でマトモなハイドログラフが導ける筈がない。

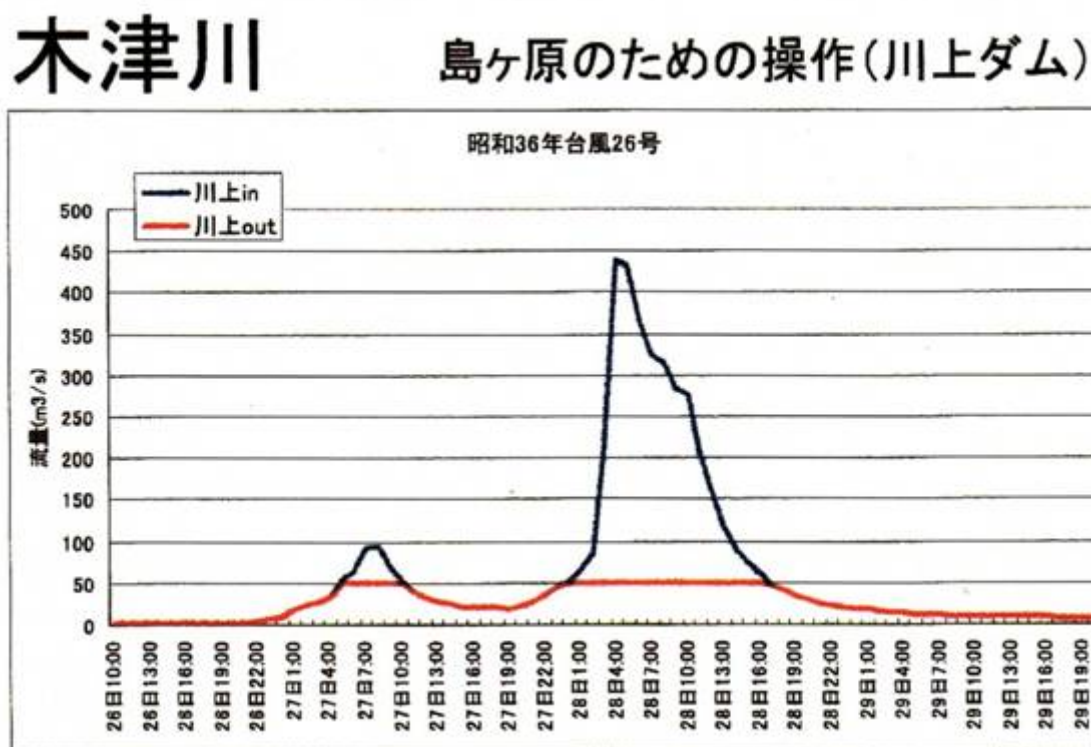
川上ダム整備後は200M³/Sのピーク流量低減と読めるが、川上ダムの諸元が示されていない。

洪水調節量が条件として入らなければハイドログラフがマトモに導け無い筈である。次ページに「河川分科会淀川水系河川整備基本方針検討小委員会」で示された川上ダムの「洪水調節ハイドログラフ図」を示す。ダムの洪水調節量は390M³/Sと認められる。降雨パターンは違おうが大きく変わらないだろう。この程度の量が19KM先の岩倉峡までの河道貯留効果を考えると、ピーク流量マイナス200M³/Sの働きをするとは思えない。詳しい流出解析（洪水追跡計算）を示して貰いたい。

- 6) 川上ダムの整備で70KM離れた枚方地点において、ピーク流量が400M³/S低減できるのか？(P.21)
上記のようにダムの洪水調節量は限られている。河道貯留効果を考えると全く低減の働きは無いのではないか。また流下到達時間を考

NO.2

えると、洪水波の連続性は全く考えられず、このようにピーク流量を低減させられると思うのは幻想ではないか。詳しい流出解析（洪水追跡計算）を示して貰いたい。



- 7) 全体として、何が「上下流・本支川間のバランスに基づく治水対策」なのか、さっぱり理解できない。

あらためて「バランス」の定義、基準を具体的に示して貰いたい。
元々、自然が作った狭窄部、洪水氾濫原に手を加え、開発を進めて来たことに、「水災の絶えることが無い」原因がある。こういった原因作りを止める事、元々の洪水氾濫原を復元する事が自然に適った「真の治水対策」であろう。

- 8) 基本高水量の過大設定を気付いていないのか？

この問題は「確率・統計学」の初歩に当たるが、雨量確率から流量確率を求める事が「条件付き確率」即ち、「複合事象の確率」を求めているのである。その為、淀川水系の枚方地点における基本高水のピーク流量17,000M³/Sは、1/200(超過確率=0.005)ではなく、1/4000(超過確率=0.00025)位になる。

N0.3

この確率論は第58回委員会の参考資料1「一般からの流域委員会への意見—N0.774・・・『基本高水のペテン師組（あるいは無知団）』＝確率統計学における河川局の煩悶」にて述べているので、参照賜りたい。

1/4000の確率とは、4,000年に1度あるか無いかの確率の洪水だということになる。目標数値だとしても余りにも過大であり、結果、国民の税金を湯水のように、いや、洪水のように無駄遣いする事に繋がりはないか。明確な説明をして貰いたい。

上記の「基本高水の選定における確率論の致命的とも言える誤認」により、基本高水流量を過大なものとして使っている為に、治水計画が歪んでいる。これは重大な政治問題であると同時に河川管理者の資質を問うものである。全面的に、根本的に再検討されたい。